



\*\*\*\*\*

【hot issue】 第 11 回年次会合の全体スケジュールなどが発表

\*\*\*\*\*

2010 年 1 月 16 日～18 日、中欧で初の開催となる第 11 回年次会合。キーノート・スピーカーとして、英国トニー・ブレア前政権のブレインとして『第三の道』を提唱したアンソニー・ギデンズ氏（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス名誉教授）が登場します。今会合で、GDN-Japan は地域ネットワークメンバーである、東アジア開発ネットワーク（EADN）と共同で平行セッションを開催します。GDN-Japan アドバイザー／文教大学国際学部教授の林薫氏をチェアマンとして、『Economic Integration in Asia, Trade, Infrastructure and Finance』をテーマにセッションを行います。

[http://www.gdnet.org/cms.php?id=conference\\_details&conference\\_id=11](http://www.gdnet.org/cms.php?id=conference_details&conference_id=11)（年次会合詳細/英語）

[http://www.gdnet.org/CMS/getFile.php?id=gdnet\\_eleventh\\_annual\\_conf\\_program\\_at\\_a\\_glance](http://www.gdnet.org/CMS/getFile.php?id=gdnet_eleventh_annual_conf_program_at_a_glance)（年次会合プログラム）

\*\*\*\*\*

【news etc.】

\*\*\*\*\*

▼ GDN 開発賞プロジェクト部門のセミファイナリストを発表。第 11 回年次会合で受賞セレモニーの予定

[http://www.gdnet.org/cms.php?id=2009\\_awards\\_top\\_proposal\\_announcement](http://www.gdnet.org/cms.php?id=2009_awards_top_proposal_announcement)  
（英語）

▼ GDN ワーキングペーパーシリーズで新たに 10 テーマがリリース

[http://www.gdnet.org/cms.php?id=publications\\_listing&type\\_id=1](http://www.gdnet.org/cms.php?id=publications_listing&type_id=1)（英語）

▼ GDN 国際共同研究プロジェクト プロポーザルの締切りは 11 月 27 日

[http://www.gdnet.org/cms.php?id=3ie\\_request\\_for\\_proposal\\_feature](http://www.gdnet.org/cms.php?id=3ie_request_for_proposal_feature)（英語）

▼ 第 18 回 GDN-Japan ネットワーク会合が、12 月 4 日に JICA 研究所にて開催

<http://www.jica.go.jp/gdn/japanese/outline-j/activity.html>（これまでのネットワーク会合詳細/日本語）

\*\*\*\*\*

【コラム】～ 私とGDN ～

\*\*\*\*\*

東京大学東洋文化研究所 特任研究員  
王 智弘

2009年2月、金融危機で世界経済が大きく落ち込む状況の中、クウェートで開催されたGDN第10回年次会合に参加した。テーマは「天然資源と開発 (Natural Resources and Development)」。近年、世界が注目する資源価格の高騰を背景に、「資源を持たざる国」の日本でも天然資源に対する社会の関心は高まっている。ただ、省エネルギー技術あるいは未利用資源開発に象徴される自然科学・工学分野の研究と比べると、社会科学分野では必ずしも強い存在感のあるテーマではない。それゆえ、経済学者をはじめ、世界中から集まった研究者たちがこのテーマを議論するために一堂に会した光景は、社会科学の課題としての重要性を感じさせる迫力があつた。

会合では、特にエネルギー・鉱物などの埋蔵資源開発から得られる利益と経済発展・社会統治の関係を問う報告の多さが印象に残った。海外からの安定した資源確保が主要課題の日本とはいえ、工業化社会の基盤をなす鉱物・エネルギー資源政策分野への知的貢献が弱いという現状はいかにも寂しい。地理的にもテーマ的にも情報へのアクセスが難しい課題ではあるが、情報の交換あるいは協働研究者とめぐり合う場としても、GDNというネットワークを積極的に活用し、さまざまな分野へ知的貢献していくことが大切である。

一方、鉱物・エネルギー資源に比べて、森林・水産・土地資源などの再生可能資源に関する研究報告の割合が小さいのも印象的であつた。セッション内容の構成が、資源価格の高騰期に組まれたこともあり、再生資源へ注目が集まりにくい時期であつたという事情もあるだろう。ただ、日本が恵まれている水、森林、水産資源などの再生可能資源の管理も、今、世界的に重要なテーマである。このことを裏づけるかのように、共有資源管理の仕組みを実証的に解明したエリノア・オストロム インディアナ大学教授が、今年度のノーベル経済学賞者に選ばれたことは記憶に新しい。今回の日本からの発信内容でもあつた農林水産業を基盤とする地場産業、さらに文化資源など天然資源以外の資源との組み合わせから探る持続的開発の実証的・理論的研究も、今後日本からの知的発信が期待できるテーマだろう。

会合全体を通じて印象に残つたのは「調査研究と政策の橋渡し (Bridging

